

審査員講評

■日本画

評 岡部 巖

みなさんそれぞれに個性を発揮した意欲的な作品でとても嬉しい気持ちになりました。

市展賞「まいまゆ」は、画面一杯に配置した人物の構成力、中間色を基調とした色彩共に魅力的な作品で、良い意味での脱力感を感じられるところもよいです。市長賞「故郷の思い出・夏休み」は、一つ一つ丁寧に描かれており、抑えた色調と相まって懐かしさを感じられる作品です。楽しみながら描いている姿が想像されます。優秀賞「繚乱の秋」は、落ち着いた色彩の重なりが綺麗で、その重なりが画面の奥行きを感じさせます。奨励賞「レトロなカボチャ」は、様々に工夫されており、大変意欲的な作品への姿勢を感じます。モチーフ一つ一つの描写も丁寧に描かれており良いのですが、作品全体のまとめ方という点でもう少し改善の余地があるように感じます。

評 温井 喜央

美しい自然の中で20年間育てられた市展は、日本の美意識を有し新鮮で充実したレベルを感じます。素直な感動と真摯な作画の心が素晴らしく、清爽な気に満ちた展覧会になりました。賞にもれた作品の中にも心に残るものがありました。

市展賞「まいまゆ」は、さりげない描写でありながら、日本画の概念にとらわれぬ豊かさのある表現で、爽やかで鮮やかさのある色彩と構成力が素晴らしい。市長賞「故郷の思い出・夏休み」は、昔よく見かけたさりげない風景、素朴な画面で、手前の自転車と親子が作品を引き締めている。作者のやさしい目を感じる力作である。優秀賞「繚乱の秋」は、真摯に対象を見つめ、自然の美しさを情緒豊かに描き上げている。作者の自然に対する思いが良く出ている。

■洋画

評 布山 淳一 米田 雪子

多彩な表現と努力を感じさせる作品が多く見られ、真摯に向かう姿勢に好感が持たれた。青年部の出品が例年より少なく残念であった。

市展賞「宮川畔待春」は、マチエールに努力を重ね、古木を利用したアイデアや、木や雪、岩、水面の表現が魅力的で、春を待つ河岸の様子がよく伝わり好感が持たれた。市長賞「あまり遠くない未来を見据えて」は、将来の期待と不安が、色彩と構成と、確実な技術力で上手く表現出ている。優秀賞「所業無情（権力の暴走）」は、技法を駆使して、思いのままを画面にぶつけ独自の世界観を表出させている。奨励賞「記憶の中で 2025」は、青一色のエンボス技法で、意識の広がりを感じられる。奨励賞「LIFE」は、対象を細かく丁寧に描き上げ、自らの世界から宇宙までの広がりを感じさせる秀逸作品である。

■彫刻

評 松本 弘司

今回は、出品数が少なく、市展賞に該当する作品がなく残念でした。

市長賞の「耆老」は、素材の石膏の上に黒っぽい塗料を重ね、おもしろい表情を作っています。骨格もしっかりと表現されていて、人物の性格も感じさせる良い作品になっています。欲を言えば

台座と首との関係がしっかりとまとめられると、よりインパクトのある作品になったと思います。優秀賞の「信」は、彫刻としての石膏の仕事は良くやられていると思いますが、人体の顔や手の表現に形に対する甘さがあり、そこをより深く見つめていかれると作品の密度が上がっていきます。奨励賞の「スリットドラム『起し太鼓』」は、彫刻で音をどう感じさせ伝えるかを考えると難しい問題です。「クマタカ」は彫刻としてのサイズ感をもう少し考えるとまた違う印象になるのではと思います。入選の「般若」は、レプリカとしては良いのですが、オリジナルな表現をこれから求められると、色々な発見があると思います。

評 森田 一成

今年度は、出品数が例年に比べて少なかったこともあり、市展賞は該当なしとさせてもらった。

市長賞の「耆老」は、石膏に着色された老人の顔像で、骨格やシワ、窪みなどの特徴を的確に捉えながら、表面のタッチやマチエールによって、長い人生を歩んできた人物の力強さを感じさせる作品となっている。優秀賞の「信」は、女性の胸像と馬の頭像を組み合わせた石膏の作品で、構成に工夫が見られる。造形的にはやや甘さが残る部分もあるが、石膏の扱いや空間表現に確かな感覚があり、今後の展開に期待が持てる。奨励賞の「クマタカ」は、木彫作品で、サイズは小さいながらも、胸筋や足の筋肉などの特徴を的確に捉えた力強い作品でありながら、可愛らしさも感じられる。奨励賞の「スリットドラム『起し太鼓』」は、またがって叩ける構造になっており、スリットの長さや板の厚みによって多彩な音が出るのが楽しい作品になっている。

■工芸

評 阪口 浩史 葛井 保秀

工芸作品の評価は、素材と形、場合によっては用、総合的な美しさからなると思います。

全体では、飛騨の木を生かした作品点数が多く、地域性を感じました。またミクストメディアに属する新しい感覚の作品もありましたが、新しいだけに評価が難しいところでした。やはり最後は総合的な美しさになってくるのでしょうか。制作中にも一回作品から遠ざかって自分の目指したいことを今一度確認してみる事が肝要と思いました。

市展賞「カラー、2025」、数種類の木材が用いられ、それぞれの木目が生かされています。色や傾き等の構成にカラーの生き生きとした生命力が感じられる作品です。市長賞「姫机」、伝統的な和机本体の造りと、朱塗りの美しさに完成度の高さを感じる作品です。優秀賞「無題 W」、木材の自然な造形が生かされた女性の上半身の作品には「エロイズム」の美しさが見られます。奨励賞「三色半月花器」、三層に塗り分けられた色彩のバランスが良く、作者の個性が見られます。佳作「土灰釉水指」、大ぶりの水指には力強さが感じられ、還元焼成された土灰釉の発色に焼き物ならではの奥深さが見られます。

■書

評 船坂 久華

青年部の奨励賞「臨傳山」と「臨王鐸」は、明・清時代に流行した連綿する行草を強い筆力で書き連ねた長条幅の臨書です。どちらも巧みな筆使いで、文字の大小や傾き、線の太細、余白、筆脈など原本の表情の変化をよく捉えています。日頃の並々ならぬ練習の成果が十分に発揮され、躍動感・リズム間のある完成度の高い作品に仕上がっています。奨励賞「乙瑛碑」は、漢時代の代表的な隸書碑の臨書です。雄古と評される書風の安定感のある構えと、たっぷりした厚みのある波磔の

特徴をよく捉えています。奨励賞「孫秋生劉起祖等造像記」は、北魏の楷書の臨書です。造像記特有の右上がりの字形や方筆と呼ばれる鋭角的で力強い点画の特徴をよく捉えています。

臨書の目的は、歴史的に価値の定まった書の古典から書のような技法を学ぶことです。市展鑑賞の機会が、篆・隸・草・行・楷の書体や書風の多様性に触れ、書表現の豊かさに関心を持つきっかけになることを願っています。

評 山口 李鳩

一般部・青年部共に、字体や崩しの怪しい部分が散見されましたが、本展の開催意義を第一に考えて、今回は一切不問に付して審査しました。文字を素材として表現する書道芸術にとって、文字をおろそかにする行為はNGです。技術や感性を磨くと同時に、文字を正しく認識し、正しく使いこなすことが肝要で、特に指導者はこれを忘れてはいけません。今回の課題と申せましょう。

市展賞「春霞」は、三部構成からなる大字仮名で、中央部に大きな展開を配して疎密感を表出させると共に、適度な潤渇が見る者に心地良さを感じさせる秀逸作。市長賞「汾上驚秋 蘇頌詩」は、練度ある筆致と巧みな技術が土台となり、余白の美しさが際立つ軽妙洒脱な作品です。優秀賞・奨励賞・佳作は、いずれも連綿行草で、良く筆も動いていて今後の飛躍が楽しみな作品です。

■写真

評 立川 洋

今回の作品も綺麗に撮れた写真が大半でした。メカの進歩に嬉しさを思います。そんな中、自分の作品に仕上げる楽しさを持って写真を写心へ作り上げれば（カメラマン）作者の意図表現が出来上がり、自分の作品に成ります。常にシャッターを切る時に何に感じているかを探っていく事が重要です。

市展賞の「生生流転」は、作品作りに撮りこむ前から仕上がりの計算をして作り上げられた写心です。作品作りの成功作ですね。市長賞の「煌めきの朝」、この作品もこの日この時間にして作り上げられた写心です。氷点下の凍てる中での努力の賜物ですね。優秀賞の「春爛漫」、よくぞ山桜咲き乱れる中、美しく咲く花を待つ人も待つ山猿もうれしい季節です。綺麗に咲いた花を美食するサルも憎めぬ顔です。出会いは大事ですね。入賞作は、特に画面の構図構成も出来上がりシンプルに仕上がり写心作品で良好でした。奨励賞作品も良い作品が多く、今後が楽しみです。入賞作品には、出品者の参考になるものが多いと思いますので、今後の為に生かしてください。

評 北口 秀夫

写真は記録の他に、自分がどのような光景に出会い魅せられたかを自分の世界として表現して、見る人にアートとして伝えることである。

市展賞「生生流転」、湖面に落ちた花びらをスローシャッターで撮影している。花びらの動きをよく観察しないとこの写真は生まれない。花びらのそれぞれ異なる動きからこんな題名が浮かんだのだろうか？奥の湖面は静かで動と静の調和が良い。シャッタースピード、露光は適切で作者の技量は高い。市長賞「煌めきの朝」、針葉樹に霧氷が付く、凍てつく様な朝の光景である。手前に珍しいダイヤモンドダストも見られ、とても珍しい自然現象を記録した。優秀賞「春爛漫」、山桜に猿が餌を食べに来ている。猿がこちらを見た一瞬シャッターを切っている。背景色は桜と同系色で、題名通りの作品となった。奨励賞「天空の棚田」、残雪が残る山と新緑が映える山里、そんな中での田植え作業に季節感を感じる。奨励賞「粋な朝」、早朝の水田の朝焼けの補色にあるハスの葉の緑色が美しい。咲き始めた花一輪も印象的である。